

里山産業論 「食の戦略」が六次産業を超える

金丸弘美著 角川新書刊 定価800円(税別)



日本は人口減少、高齢化が進み、自然環境が損なわれ、歴史や伝統文化が失われ、農業や漁業が衰退し、地域共同体の存在が希薄になつていと言われる。これに歯止めは掛けられるのだろうか。本書では全国津々浦々に足を運び地方の現状を検証する。同時に、世界に田舎が産業を興している国があることを紹介する。「食の戦略」が地域を興し、社会を育み、さらに国を富ませている事例だ。著者はまずイタリアに向かう。ピエモンテ州ブラ市にあるスローフード協会を訪れる。協会は農産品の生産・販売をサポートし、参加型ワークショップを運営し、食文化を後世に伝える大学の創建にまで関与する。同州には、外国人のためのイタリア料理研修機関、ICI

Fがある。各国から研修生を募り、母国に戻つて学んだ料理を作る、イタリアの食材、ワイン、加工品を購入する、料理を食べた客が観光客として来る、という良循環が生まれる。国や自治体、生産者はICIFを支える。イタリアだけでは足りない。著者はフランス中部のサントモールで実施された「味覚の講座」に参加する。この地域では、町の景観づくり、歩ける商店街づくりに市民、行政が一体となつて取り組んでいる。また、「食の戦略」、有機農法、食育に取り組む生産者たち、市民たちの姿もレポートする。

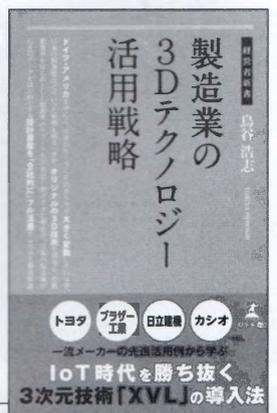
ロングセラー『田舎力』を送り出した著者は日本全国にも足を延ばす。「活力ある地域には共通項がある」と著者は言う。町全体のデザインを考え、暮らしと調和した街づくりをし、独自の農産品の生産・流通ラインを持つている、地域の特性が明確にされている、などを挙げている。食の戦略で人も地域も社会も豊かになるという「新産業論」は、地方創生の切り札として注目されている。

今月の本棚

本著者によれば、世界のモノづくりは大きな変革期にある。米国では「モノのインターネット」といわれるIoTを活用した製造業の変革がゼネラル・エレクトロニクス社の提唱するインダストリアル・インターネットを中心に進められていくし、ドイツでは政府主導で「第4次産業革命」ともいわれる「インダストリー4.0」が推進されている。また、中国では「製造強国」を目標とした10カ年計画、「中国製造2025」が発表されている。

いよいよ激化する競争の中、欧米やアジアのライバルたちに伍して戦うために日本の製造業は何をしなければならぬのか。答えを突き付けられている。それにはさらに次元の高い、国境を越えたすり合わせ能力が求められる。

3Dというと、とかく映画やゲームの立体画像に注意が行きがちだが、今や様々な分野で最も革新的な技術を提供しているものの一つである。本書は、「3Dで世界を変える」を信条に、超軽量化多次元技術「XVL」(オリジナル



の3D活用基盤技術)の製造業や建設業への新たな用途開拓に日夜東奔西走する著者がまとめた「3Dテクノロジーの活用戦略」である。ここでは、トヨタ、ブラザー工業、日立建機、カシオをはじめ、先駆的に実践する企業の成功例を紹介している。ツバメックスという企業では、XVLを大型プランクの施工設計に活用している。設計上の膨大な3Dデータと、計測した大量の点群データを合体させて検証する道具が欲しいという要請に応えたりしている。まさに点群データとXVLを統合したソリューションと言える。現場の現実と設計モデルを突き合わせているのだ。仮想と現実が融合する時代は意外に近いのかもしれない。

製造業の3Dテクノロジー活用戦略

鳥谷浩志著 幻冬舎刊 定価800円(税別)